

# スリランカにおける高齢者介護施設の居室計画に関する課題考察

# CONSIDERATION OF ISSUES CONCERNING PLANNING THE HABITABLE ROOM OF CARE FACILITY FOR THE ELDERLY IN SRI LANKA

森 傑 — \* 1      清田英壬 — \* 2

Suguru MORI — \* 1      Emi KIYOTA — \* 2

キーワード：  
プライバシー、高齢者、介護施設、アクションリサーチ、技術移転、国際協力

Keywords:  
Privacy, The elderly, Care facility, Action research, Technology transfer, International cooperation

This study aims to analyze public-private sense of residential environment on care facility for the elderly by action research on the design project in Welimada village, Nuwara Eliya, Sri Lanka, which purpose is international cooperation and technology transfer for developing countries. Through the field survey about existent facilities in Colombo and neighbor's houses in Welimada, it was cleared that sharing a room is not entirely negative in Sri Lanka. And also, conducting the furniture layout experiment, the following were found; 1) People in Sri Lanka tend to import beds densely in the situation of sharing a room. 2) Physical divide between each beds is not necessarily distinct. 3) common place in a room is secured positively.

## 1. はじめに

開発途上国は、先進諸国と同様に高齢社会や介護問題と決して無関係ではないにも関わらず、高齢者の介護をはじめとする福祉関連施設の整備は全くといってよいほど進んでいない。特にスリランカは、開発途上国の中で最も早く少子高齢社会を迎えようとしており、出生率も人口が安定化する水準2.1人を下回る状況となっている<sup>1)</sup>。また、政府資金は長年の内紛への対処に優先的に充てられてきたため、綿密な制度を必要とする社会福祉システムの公的な整備も大きく立ち後れている。加えて、現存する介護施設は完全に寄付・慈善活動に依存しており、整備内容も応急処置的であるため、石綿含有建材の使用や生活雑排水未処理などの環境問題が放置された状態となっている。施設居住者・利用者のみならず、周辺住民の生活と健康へ深刻な影響を与えていることはいうまでもない。

そのような中、福祉関連の制度およびシステムが未だほとんど確立されていないスリランカにおいて、近い将来に確実に必要となる高齢者介護施設の質の高い整備と普及を推進すべく、2007年4月より、筆者らを含む日米錫の研究者・実務家によって構成されたプロジェクトチームが非営利活動を開始した<sup>2)</sup>。その目的は、日本の建築計画学をはじめ先進諸国で蓄積された高齢者福祉施設の計画に関する知見や技術をいわゆる“後発性の利益”として最大限に活用し、スリランカで今まさに求められている恒久的な福祉施設の具体的な実現方法を学際的・国際的な研究グループによって追求しようとするものである。その活動過程を通じて、高齢者介護施設において先進諸国では有用とされている理論や手法<sup>2)</sup>、具体的には個人

のプライバシーを最優先に考えての浴室・便所を完備した個室の確保が、必ずしも無批判的にスリランカへ適用しうるものではない可能性が浮かび上がってきた。

そこで本研究は、ヌワラエリヤ地域・ヴェリマダ集落における具体的な施設計画プロジェクトのアクションリサーチ<sup>2)</sup>として、特に高齢者介護施設における集団生活・集団居住に関わるプライバシー問題に注目し、スリランカの既存施設の実態調査、および、計画案を用いた多床室における家具レイアウト実験を実施・分析することで、スリランカ特有の居室計画における課題について考察することを目的とする。

施設整備予定のヌワラエリヤ地域にあるヴェリマダ集落は、コロンボから東に90kmの位置にある。集落は木々に囲まれ、周囲には田畑が広がっている。標高は約1,900mであり、年間の平均気温が16℃、スリランカの中では比較的涼しいエリアである(図1)。

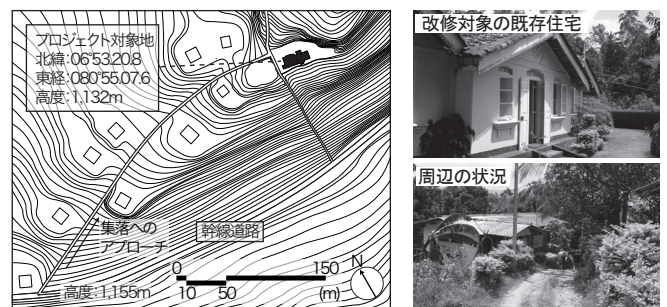


図1 プロジェクト対象敷地と近隣住宅の立地

<sup>1)</sup> 北海道大学大学院工学研究院 教授・博士(工学)  
(〒060-8628 札幌市北区北13条西8丁目)

<sup>2)</sup> ウィスコンシン大学ミルウォーキー校 博士研究員・Ph. D.

<sup>1)</sup> Prof., Faculty of Engineering, Hokkaido Univ., Ph. D. in Eng.

<sup>2)</sup> Post Doctoral Fellow, Univ. of Wisconsin-Milwaukee, Ph. D.

## 2. 既存施設の実態調査

スリランカの高齢者介護施設の現状を把握するため、コロンボにおいて開設されている4施設について、2007年6月29日～7月1日に実地調査および施設関係者へのヒアリング調査を行った。ヒアリング調査では、施設関係者から施設の現況を自由に説明してもらう方法とした。施設ごとの調査結果の概要を図2に示す。

### 2-1. Gunesekara Memorial Home For Elders(図1-I)

一般の住宅を改装し施設として利用しており、居住者・スタッフとも全員が女性である。

寝室では1部屋に3～4床のベッドが配置されている。ベッドの上には蚊などの虫による感染防止のために蚊帳が掛けられている。収納家具類は、必ずしも居住者全員へ割り当てられているわけではない。施設内での感染防止のため、感染症を患っている高齢者がまとまって生活する多床室の寝室があり、その部屋のみ専用のトイレが設置されている。リビングには仏像が置かれており、仏教徒の習慣である礼拝が行われる場所となっている。また、テレビを鑑賞する、居住者が集まって歌を歌うなどのレクリエーションの場としても利用されている。ダイニングでは、食事時間以外にも居住者が佇んでいる様子が見られた。

女性スタッフから、「介護に関しての教育制度や免許などはない」「老人一人一人のプライバシーのために部屋や生活スペースにドアをつける必要はない」「(施設での生活において)四人一部屋で生活することに問題はない」などの意見が得られた。

### 2-2. Moratuwa SSS And Home For Elders(図1-II)

就学前の児童が通うプレスクールが敷地内に併設されている。高齢者介護施設とプレスクールの間には柵などの境界は設けられていない。スタッフ・男性居住者・女性居住者がそれぞれ別室に分かれて生活している。

寝室は、男性用・女性用ともに外気を遮断する壁や建具のない半屋内として計画されており、一部屋に12～14床のベッドが配されているが、寝室と廊下および外部の間には、視界を遮るものは設置されていない。居住者個人のベッド単位で、感染予防のための蚊帳およびカップボードが割り当てられている。また、室内の気温を調整するために、シーリング・ファンが設置されている。感染症を患う居住者は、施設内での二次感染の拡大を防ぐため、別棟に建てられたシクルームへ隔離されている。食堂には、キリスト像と仏像が並んで祭られており、食事時間以外にも礼拝の場として利用されている。テラスには椅子が多数用意されており、居住者同士がコミュニケーションをとったり、僧侶が居住者に対して説法を行ったりするといったことが営まれている。また、一人で新聞を読んでいる居住者の姿も見られ、テラスはプライベートな時間を過ごす場所として活用されている。

男性スタッフから「介護スタッフは施設内で寝泊りをしており、1日17時間労働である」「施設で生活する高齢者の中には身体の不自由な者もいるが、他の高齢者と同じ生活をさせている」「(施設内で)エクササイズを行っている」「施設の高齢者はベッド以外ではベンチや椅子があるところに居ることが多い」などの意見が得られた。また、女性の施設居住者からは「(施設内での生活について)よく読書をしている」「(施設内には)友人が8～9人いる」「外にあるシャワーで水浴びをする」「就寝時間は決められていないため、

好きな時間に寝る」「外部から来た知り合いと施設外へ出かけることもある」「(寝室で個室を選べるとしても)病気になった場合でもルームメイトが居るため、安心できるから個室は選ばない」などの意見が得られた。

### 2-3. Gamini Matha Elders(図1-III)

仏像が置かれたドーム型の礼拝所が併設されている他、居住者のワークスペースとして作業室が設置されている。居住者・スタッフとも全員が男性である。

寝室は、ベッドの頭方向を壁に向けて均質に配置された12床の多床室である。寝室の隣室は作業室であり、社会との関わりが希薄となった居住者に対して社会参加の機会を与えるという主旨で、製本作業の仕事が取り組まれている。居住者全員が仏教徒であり、併設された礼拝所で毎日、礼拝や瞑想が行われている。

男性スタッフから「子供達が訪問に来ることがある」「お坊さんが説法を行いに来る」などの意見が得られた。

### 2-4. Lions Club Home For Elders(図1-IV)

男女の寝室が別棟で建てられている施設であり、スタッフの事務室や寝室も別棟となっている。食堂棟については男女共用となっており、各棟に挟まれるかたちで施設の中心に配置されている。

寝室は、2～4床のベッドを1つのクラスターとしてパーティションで区切られている。ベッドに付属した机と椅子は共同利用する。食堂へは、居住棟から半屋内のテラスを経由して、一度屋外へ出てアクセスする。食堂にはいくつかの遊具、食堂のテラスにはテレビが設置され、食事以外の時間帯にも利用されており、居住者同士の交流の場として機能している。

男性スタッフから「施設には元々ホームレスであった高齢者が入居している」「施設に入居している老人は基本的に自立生活を送ることができる人である」「施設には家族が訪問に来るが、家族以外の人は来ることはここでは少ない」「スタッフはこの施設の敷地内で生活している」「スタッフの仕事はボランティアでやっていることであって、ビジネスではない」などの意見が得られた。

## 3. スリランカ特有の公私概念についての仮説

先進国では近年、高齢者介護施設における多床室は、従来の医療的観点と施設側の効率を重視する集団管理的な視点が優先されたものであり、高齢者の人権倫理に立った形式ではないとして否定的に評価され、プライバシーが最大限に確保された個室型の寝室が推奨される傾向にある<sup>2)</sup>。しかしながら、前章で解説した通り、既存施設において居住者が多床室を否定的には捉えていないことを踏まえると、スリランカではそれを必ずしも否定することはできないと考える方がむしろ自然である。加えて、プライベートな行動・行為が共有スペースで様々な営まれていること、説法や製本作業などの社会活動が施設のプログラムへ積極的に組み込まれていること、一般住宅においても他者を迎え入れるようにリビングを設える慣習があることなども踏まえると、スリランカには、日本や欧米で公私を明確に区分することを重視するのとは異なる質の公私概念があるとの仮説が導かれる。

例えば、既存施設のMoratuwa SSS And Home For Eldersにおいて、このようなスリランカ特有の公私概念を象徴するような出来事があった。一人の女子学生が慣れた様子で施設内へ入り、女性用寝



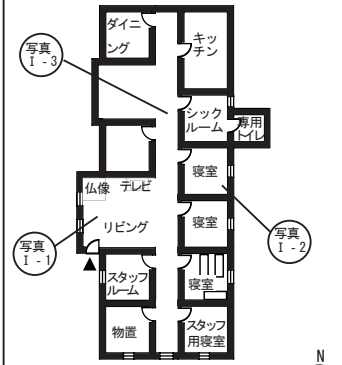



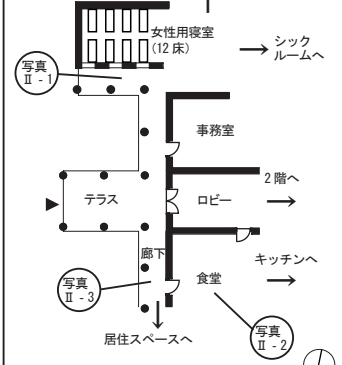

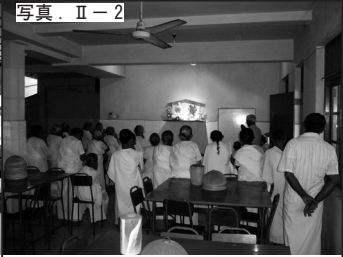

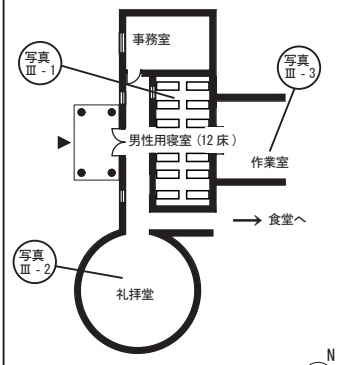



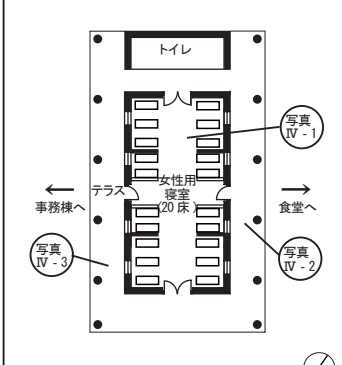



<p>I. Gunasekara Memorial Home For Elders</p>  <p>1/500</p>	<p>写真. I-1</p>  <ul style="list-style-type: none"> <li>・リビングには仏壇、テレビ、ソファ、テーブル、椅子が置かれている。</li> <li>・憩いの場としても利用されるまた教徒の居住者が礼拝を行う場としても利用される。</li> <li>・大勢が集まりレクリエーションを行う場でもある。</li> </ul>	<p>写真. I-2</p>  <ul style="list-style-type: none"> <li>・1室につき3～4床のベッドが置かれている。ベッドの下には個人の衣類が納められている。</li> <li>・天井には蚊帳が付いている。</li> <li>・部屋の隅には収納があるが全員分はない。</li> </ul>	<p>写真. I-3</p>  <ul style="list-style-type: none"> <li>・寝室のドアは開けられたままになっており、そこにはカーテンで視界の遮断が行われる。</li> <li>・廊下には物を置くための台や棚が置かれている。</li> <li>・手すりは廊下の先にあるトイレまで続いている。</li> </ul>
<p>II. Moratuwa SSS And Home For Elders</p>  <p>1/500</p>	<p>写真. II-1</p>  <ul style="list-style-type: none"> <li>・寝室は壁がないため、廊下と寝室の視界が抜ける状況にある。</li> <li>・廊下側には椅子が並べられており、居住者の集まる場としても利用される。</li> <li>・天井からは蚊帳とシーリング・ファンが取り付けられている。</li> <li>・渡り廊下は半屋内である。</li> </ul>	<p>写真. II-2</p>  <ul style="list-style-type: none"> <li>・食堂では食事以外の行為として礼拝が行われる。礼拝は食事の前に行われる。</li> <li>・キリスト教徒と仏教徒が一齊にお祈りをする。</li> <li>・神棚にはキリスト像と仏像が並んで備えられている。</li> </ul>	<p>写真. II-3</p>  <ul style="list-style-type: none"> <li>・玄関前に設置されたベンチは居住者の読書、談話スペースの場所にもなっている。</li> <li>・ベンチがある玄関は雨除け、日差し除けのため屋根が道路近くまで延びている。</li> </ul>
<p>III. Gamini Matha Elders</p>  <p>1/500</p>	<p>写真. III-1</p>  <ul style="list-style-type: none"> <li>・ベッドにはタオルや衣類を掛けるラックが備えられている。</li> <li>・壁には蛍光灯が設置してある。</li> <li>・ベッド周りには個人の持ち物を収納するためにカップボード、タオル掛け、ゴミ入れが備えられている。</li> </ul>	<p>写真. III-2</p>  <ul style="list-style-type: none"> <li>・施設居住者全員が仏教徒であり彼らの生活には宗教慣習が生活の一部になっている。</li> <li>・天井にも仏教画が描かれ、祭壇がつくられている。</li> </ul>	<p>写真. III-3</p>  <ul style="list-style-type: none"> <li>・施設の居住者は対外的な社会との関わりとして製本作業が高齢者によって行われている。</li> <li>・車椅子も用意されており身体の不自由な高齢者も作業をする。</li> <li>・テレビが置かれている。</li> </ul>
<p>IV. Lions Club Home For Elders</p>  <p>1/500</p>	<p>写真. IV-1</p>  <ul style="list-style-type: none"> <li>・寝室は4床が1つのクラスターとしてパーティションで区切られている。</li> <li>・シーリング・ファンがベッド2台につき1台ずつ設置されている。</li> <li>・歩行補助器具を用いる高齢者も一緒に生活している。</li> </ul>	<p>写真. IV-2</p>  <ul style="list-style-type: none"> <li>・テラスには多数の椅子と1台のテレビが設置されており、居住者の憩いの場となっている。</li> <li>・椅子に関しては備え付けのものではなく、持ち運びができるものである。</li> <li>・壁には外灯が設置してある。</li> </ul>	<p>写真. IV-3</p>  <ul style="list-style-type: none"> <li>・土地は傾斜地であり個室型福祉施設、女性棟、男性棟、食堂が単体で建てられているため、スロープを配して移動時の障害を減らしている。</li> <li>・壺は雨水を屋根からつたわせて集めるために設置されている。</li> <li>・建物間の段差は大きい。</li> </ul>

図2 既存施設の実態概要

室前の廊下を移動していた居住者へ話しかけ、椅子でしばらく話し、その後居住者に付き添ってベッドのある寝室へと移動した。施設スタッフに聞くと、その女性は親族でも昔からの知人でもなく、近所に住む女子学生であり、以前に当施設へボランティアで介護にきたことから、時々立ち寄るとのことであった。また、このような地域住民との交流は決して珍しいことではなく、スリランカではごく自然な光景であるとのことであった。当施設は、寝室と廊下および食堂などの共用スペースは、腰の高さ程度の壁のみで仕切られ視線の通る一体的な空間構成となっており、公私領域の区分は非常に曖昧である（図2写真Ⅱ-1）。このことが、このような交流活動が生まれることと密接に関係していると考えられる。

そこで、筆者らによる既存住宅の改修および増築による施設計画プロジェクトでは、多床室を基本とし、多様なかたちでの滞在や活動ができる場所をダイニングルームと回廊で確保することを骨子として、高齢者介護施設の基本計画を行った（図3）。その基本計画について、2008年7月20日に、約30人のヴェリマダ集落の住民に対し、施設計画の説明を兼ねたワークショップを開催した。計画案のプレゼンテーションでは、居住ゾーンと地域開放ゾーンは建物を別棟とすることで分けているが、回廊を配置することで両ゾーンを弾力的につなぐこと、地域住民との交流を積極的に促すためのダイニングルームを中央に配置していることなどの説明を行った。

#### 4. 多床室の家具レイアウト実験

以上の施設計画の意図と内容を地域住民に理解してもらった上で、ワークショップの一環として、多床室に関する家具レイアウト実験を行った。本実験の目的は、スリランカにおける多床室の居室に関する私的領域の確保のあり方について、より深く理解することである。施設計画の説明会に参加した地域住民のうち、実験協力の承諾が得られた8人5組に対して、プレゼンテーションを行った計画図面の一室多床型の寝室部分を拡大して作成したホワイトボード上に、ベッドを好きな数だけ好きな位置に並べてもらい、ベッド以外の必要な家具類をボード上に記入してもらおうという方法とした（写真1,2）。また、実験協力者は、先行してレイアウトに取り組んでいる他の実験協力者の様子は見ないこと、レイアウト作業中の様

子は全てビデオで記録すること、作業終了後にレイアウトの理由や考えをヒアリングすることとした。実験協力者5組について、レイアウトのプロセスとその特徴をまとめたものを、図4に示す。

実験協力者のレイアウトのプロセスを、[導入][展開][補充][決定]の4段階に分けて整理を行った。[導入]は、実験の対象スペースに対してスケール感を把握するために行っている作業の段階である。[展開]は、対象スペース全体に関して、プランの方向性を検討している作業の段階である。[補充]は、展開期で配置された基本プランに新しい要素としての家具を配置・記入している作業の段階である。[決定]は、プラン全体の最終調整を行う作業の段階である。

[導入]段階では、全ての実験協力者が均等の間隔でベッドを配置している点において共通している。ベッドの方向に注目すると、実験協力者(D)が他の実験協力者に比べ90度向きが異なっているが、[展開]段階に、他の実験協力者と同様の方向へと変更している。実験協力者(E)は、この段階で既にパーティションを記入している。

[展開]段階で特徴的なのは、実験協力者(C)(D)が、部屋の一部にベッドの密度の少ない場所を確保している点である。また、実験協力者(A)がパーティションを設置しているが、隣のベッドとの間に置くのではなく、足下に設置している点も特徴的である。

[補充]段階では、実験協力者(B)が[展開]段階で記入したカップボードに加え、各ベッドに椅子を補充している。実験協力者(C)は、ベッドの頭元に衣装掛けとカップボードを備えた家具を記入している。実験協力者(E)は、ベッドを取り囲むようにパーティションを設置している点が特徴的である。

[決定]段階では、実験協力者(C)が、[展開]段階において確保



写真1 レイアウト作業の様子

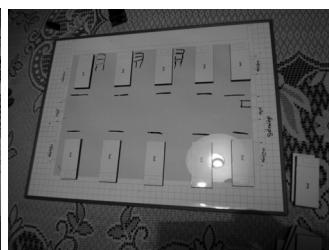


写真2 作業後のボード

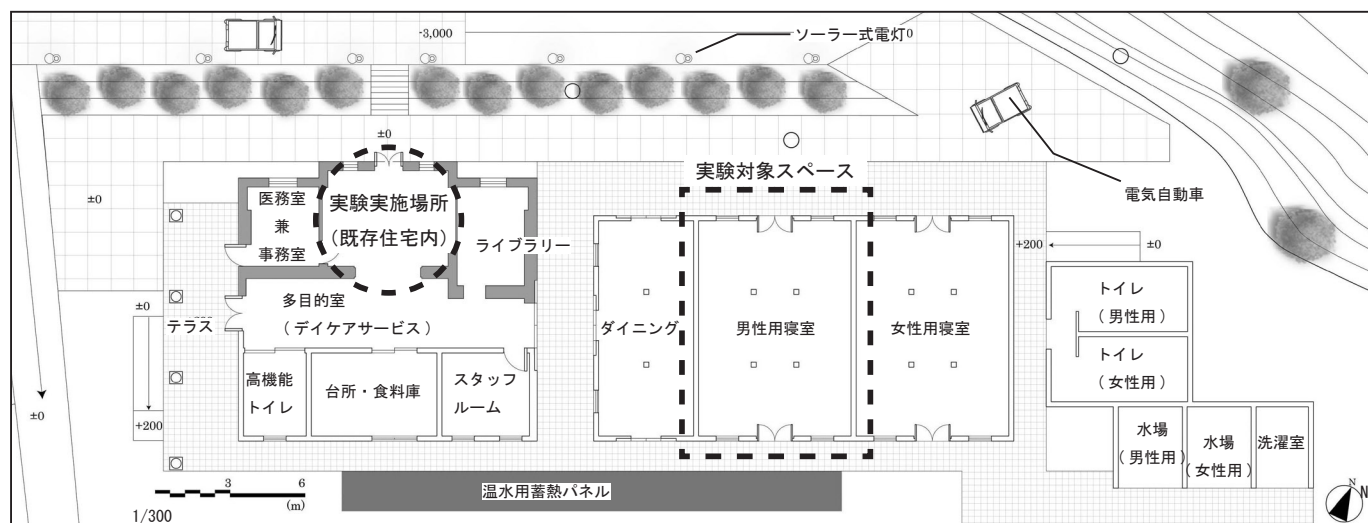


図3 高齢者介護施設の基本計画 (2008年7月20日の現地プレゼンテーションにて使用)



	(A) 60代女性 +60代女性	(B) 50代女性 +60代女性	(C) 60代男性 +60代男性	(D) 60代男性	(E) 50代男性
初期					
経過時間	0 : 00 : 12	0 : 01 : 15	0 : 02 : 04	0 : 00 : 56	0 : 02 : 59
展開					
経過時間	0 : 01 : 12	0 : 07 : 32	0 : 03 : 38	0 : 04 : 44	0 : 06 : 39
補充					
経過時間	0 : 02 : 52	0 : 08 : 18	0 : 06 : 14	0 : 07 : 47	0 : 07 : 59
決定					
経過時間	0 : 09 : 10	0 : 11 : 16	0 : 09 : 58	0 : 12 : 58	0 : 12 : 09
家具	①ベッド ②パーティション ③カップ・ボード ④テレビ ⑤衣類掛け ⑥椅子 ⑦ミシン ⑧踏み台 ⑨化粧台 ⑩窓 ⑪コーヒー・テーブル ⑫ドア				
配置状況	ベッド配置から行われたが、半分のベッド配置だけ行われた。そこから中心から対称に配置が行われた。	全体のベッド配置から行われ、その配置を決定してから、徐々に周辺の家具の配置を行っている。	初期段階では左右均等な配置を行っていたが、次の段階では非対称なベッド配置を行っている。共有スペースがある。	ベッド配置に関して、被験者中最も密度の高い配置が行われた。ベッド間のパーティションもない。	個室型の配置を行っているが、完全個室ではなくパーティションの高さを150cmと規定している。

図4 レイアウトのプロセスと特徴

していたベッドの密度の少ない場所に、共有の化粧台とテレビを配置している。同様に、実験協力者(A)(B)(D)も、共用のテレビやミシンを出入り口付近にレイアウトしている。実験協力者5組中、唯一、実験協力者(E)が「決定」段階において、各ベッドの足下側のパーティションの間にドアを記入している。

## 5. 分析

以上の家具レイアウト実験の結果、スリランカでの多床室における私的領域の確保のあり方について、3つの特徴が指摘できる。

まず第一に、あくまでホワイトボード上であり実際の空間スケールの認識を保証するものではないものの、多床室に対して、日本や欧米の高齢者介護施設に比べて、高い密度でベッドが設置されている点である<sup>注3)</sup>。

次に、そのような高い密度でベッドが配置されているにもかかわらず、隣のベッドに対して、必ずしも明確な仕切りを設けようとはしていない点である。実験協力者(E)は、パーティションに加えてドアを記入したが、ヒアリングの結果、その高さはパーティションおよびドア共に1,300mm程度であった。つまり、ベッドに横たわっている、あるいは椅子に座っている場合には視線が遮られるが、立つと隣が見えるという仕切りである。このようなパーティションのつくりは、他の実験協力者のパーティションにも共通していた。

最後に、家具や設備が共有できるような場を積極的に設けようとしている点である。特に、「決定」段階で共有スペースを確保する際に、そこに隣接するベッドを間引くことなく、また仕切りを設けることなく、その空間を確保しているところは注目すべきであり、このことから、ベッド周りのスペースは個人のプライベートな領域として確保されるべきであるという認識は、決して高くはないことが理解できる。

## 6. まとめ

日本の建築計画学は、利用者の潜在的・顕在的ニーズの理解を学問の中心とし、ヒューマニズムに基づく建築計画のあり方を探求してきた。本アクションリサーチもその観点に立ち、これまでの日本の建築計画研究で培われてきたノウハウを活用し、スリランカにおける施設計画の基盤を探るべく、既存施設の実態調査および計画案に関するワークショップを実施した。そこから得られた利用者ニーズの一つが、「高齢者介護施設において個室を必要としない」というものであった。

だがしかし、「個室を必要としない」というニーズ、つまり、スリランカの人々がよいということを絶対の根拠に多床室の計画とするという判断には、ある種の危うさがある。なぜなら、スリランカにおける多床室のライフスタイルは文化なのか、あるいは文明の発展途上という生活の中である意味強いられてきた形式なのか、という見極めが必要だからである。

スリランカでの高齢者介護施設整備における技術移転については、建設技術と建築計画技術それぞれにおいて、解決しなければならない課題の性質が大きく異なることが理解できた。前者は、情報通信やエネルギーなどの分野において一般に技術移転といわれる際の性質に近く、文明的技術である。しかし後者は、スリランカの歴史や慣習、価値観やライフスタイルと密接に結びつく文化的技術で

あるといえる。つまり、スリランカの高齢者介護施設において個室を計画することは、ある種の国際標準的な計画技術として共有すべきことなのか、技術移転という名目による先進国のスリランカ文化への介入なのか、という論点である。

本研究によって、スリランカでの高齢者介護施設の計画において、居室のあり方に関する明確な計画技術の根拠が得られたとは必ずしもいえない。しかしながら、高齢者介護施設整備における技術移転には、上述の文明的技術と文化的技術の論点があり、建築計画のような文化的技術の技術移転は非常に繊細な判断が必要であるということ、そしてそれは、研究と実践が一体となったアクションリサーチに取り組むことにより、地元の人々とのコミュニケーションを通じて、その一端を具体的に把握できるということを示し得たことが、本研究の有意義な成果であると考えている。

なお本研究は、財団法人ユニバーサル財団平成18年度研究助成によって行われたものの一部である。

## 謝辞

本研究を進めるに当たり、共同研究者の田村一郎君に多大な協力をいただいた。ここに記して謝意を表する。

## 注

- 注1) プロジェクトチームは、筆者らの他、スリジャワルデネブラ大学(錫)、NPOサルボダヤ(錫)、カンザス大学(米)、NPOエデン・オルタナティブ(米)、などに所属する医学・経営学・社会福祉学・都市計画学・建築学・環境行動学の専門家により構成されている。
- 注2) アクションリサーチとは、「実践とその分析を結びつけて1つのものにし、絶えず発展し続けるという連続性の中で専門性の高い経験を探求していく手段である」と説明される研究方法論である。文献3)を参照。
- 注3) 参考値であるが、例えば、病室の最小限面積は、欧米で1床あたり8.0～10.0㎡、日本の厚生労働省の規定では1床あたり6.4㎡とされているが<sup>3)</sup>、当実験では多床室51㎡に対して8床～14床(1床あたり3.6～6.4㎡)が設置されている。文献4)を参照。

## 参考文献

- 1) Population Association of Sri Lanka: Ageing Population in Sri Lanka, Issues and Future Prospects, United Nations Population Fund, 2004
- 2) Uriel Cohen and Gerald D. Weisman: Holding on to Home, Designing Environments for People With Dementia, Johns Hopkins Univ Pr., 1991
- 3) Ortrun Zuber-Skerritt: New Directions in Action Research, Falmer Pr., 1996
- 4) 岡田光正・辻正矩・吉村英祐・柏原士郎・森田孝夫: 建築計画2 [新版], 鹿島出版会, 2003
- 5) Oxford Institute of Ageing: Soci-Economic Implications of Ageing in Sri Lanka, University of Oxford, 2005

[2010年6月14日原稿受理 2010年7月30日採用決定]